うも弱いようだ。また case study であるにもかかわらず，他の後進国の経済発展についての比較的考察が全然払われていない。さらにまた，本書執筆にあたって，あるビルマの前閣僚が，"Make your book really critical. Only in this way you can help." といわれたのにもかかわらず，あまり critical でない。とくに政府統計の信頼性にかんする吟味がなされていない。

だから，この10ヵ年のビルマの経済発展にかんする資料集ともいうべきである。パイ教授の研究にくらべると，まったく無味乾燥な読みずらい本である。しかし，この点に本書の長所があるといえよう。少なくともビルマの経済発展にかんする研究のためには，必ず読破され，しかもその資料が十分に利用されつくされなければならない文献である。この意味で，1962年度のビルマにかんする出版物として，パイ教授のそれと相ならんで2つの重要なものだといえよう。

（本岡　武）

Lucian W. Pye, Politics, Personality and Nation Building, Burma's Search for Identity, New Haven and London, Yale University Press, 1962, *xx+307*.

ビルマ研究にかんする最近の業績として，MIT のパイ教授の本書は，まさしく白眉のものであると思われる。政治学専攻でない評者として，軽々しく本書を批評することができない。しかし，わたくしは，そのビルマの政治過程なりビルマ人の性格を分析するあたりを読みながら思わず膝をたたかざるをえないのであった。

パイ教授は，かってマラヤのゲリラ戦にかんする興味ある分析を著わされて著名であるが，教授が1958—59年，ちようどビルマの第一次軍部独裁のころ滞在，広般なインタービューをもととし，心理学・文化人類学・社会学および政治学の理論と方法とを巧みに駆使して，ビルマの政治・性格および国家建設をとりあつかったのが本書である。これは，MIT の Center for International Studies の研究成果として刊行されている。

本書は7編からなる。まず国家建設の分析の理論および方法の概説からはじまる。つぎにビルマの伝統的秩序とその変貌。これをうけて，ビルマの政治における精神と計算。さらにビルマの社会分析。この2編の総合としての政治的集積過程と変化への反動。最後に新しいビルマの展望となる。

問題の焦点は，非西欧的・伝統的な社会が近代的な国家を建設するにあたっての諸問題をビルマを事例として分析することにある。

もちろん本書は多くの問題をかかえていて，簡単に批評することはできない。ただひとつわたくしに最も印象的だった点だけをあげよう。それは著者のビルマ観，あるいはビルマ人についての理解が，少なくともファーニバル以来の伝統的な考え方とは，いちじるしく異なっている点である。いいかえると，ビルマの，あらゆる面での二元性をきわめて率直に，明快に指摘している点である。あるビルマ研究の若い婦人——彼女のビルマ観が主として文献ではぐくまれた——がわたくしに語ったことをつけ加えておきたい。彼女は，本書の校正刷をビルマに渡るまえに通読した。そのとき，ことごとに反撥の念をおさえることができなかった。ところが，ビルマに1年あまり滞在し，実際にビルマの社会に接したところ，パイ教授のいっていることも当然だと思うようになったと。これは，まったくの挿話にすぎないが，本書はあまりにも率直に分析されてあるだけに，読者をして同感と反撥，さまざまの気持をいだかせる。

ビルマ政治の専門家でなくても，またその専門がなにであろうと，ビルマに関心をいだく読者にとっては，きわめて興味深い，また挑撥的な著作である。わたくしはビルマの参考文献として，ぜひ一読をすすめたいと思う。（本岡　武）

Clifford Geertz, The Religion of Java. Glencoe, The Free Press, 1960 *pp. 386*

シカゴ大学に，新興国の研究というプロジェクトがある。著者の Geertz は，その director であり，近年，インドネシアに関する多くの秀れた研究を発表している人類学者である。ジャワ全体の社会構造に関する彼の見解は，インドネシアの政治史学者 Harry J. Benda や社会学者 W. F. Wertheim によって，高く評価されているが，その基本構想が，この書物で詳細に展開されている。従って，「ジャワの宗教」という書名は，必ずしも，この書物の内容を適確に伝えるものではない。

この書物は，本来，MIT の国際関係研究所におけるインドネシア研究企画の共同調査報告の一部として書かれたものである。しかし，それは単なる調査報告ではない。経験的にも，理論的にも，幾つかの問題の解明を狙いとしている。(1)先ず，インドネシアが直面する政治的統一，経済発展という現実の諸問題の，ジャワにおける社会的，文化的地盤の理解を狙いとし，(2)そのような理解を通じて，宗教・思想と社会の関係一般に関する理論をテストするという意図が含まれている。(3)それに，ともすれば，共同体の intensive な研究に終り勝ちな人類学的研究を，全体の社会的・文化的脈絡の理解にも役立てるように方向づける努力が認められる。

Geertz は先ず，ジャワの伝統社会を，社会経済・文化の観点より，官僚 (prijaji)，回教商人 (santri)，農民 (abangan) の三層に区分する。各層は，生活スタイル，社会的地位，宗教・思想を異にし，経済的には，santri が最も豊かであり，社会的には，prijaji が最上位に，abangan が最下位に格づけされる。生活の意味を根拠付ける思想面では，prijaji がヒンズー的世界観，santri は禁欲的回教現代主義，abangan は，animism，回教，ヒンズー教の混淆した儀礼主義に象徴される Gemeinschaft 的世界観を生活の基調とする。しかし，この点，三者の関係は段階的ではなく，prijaji と abangan は開かれた関係にあり，santri は，閉された排他性を持つ。

独立後の国民的統一過程において，各層は，異なった主義，組織の基盤となるが，同時に，各層には，保守，進歩の二層分解が認められる。prijaji には，literati 型と intelligentzia 型の両極志向が認められるが，共に国民党の基盤である。santri では，地方的保守層が Nahdatul Ulama 党，都市進歩層は，Masjumi や Muhammadijah 党の地盤となる。両者共に，排他的な回教政党であるが，前者が，土着思想にやや寛容である。これに対し，伝統的農業経済に依存する農民は，保守的であるが，所謂プロレタリアート化した農園労働者や都市労働者は，革新政党の基盤となる。Geertz は，夫々の部分層の利害軋轢の調和点を鮮かに分析している。唯，同じ問題に関心を持つ読者の参考のために，用いられた文献が余り挙げられていないのを遺憾に思う。（口羽益生）

Yale University Southeast Asia Studies; Entrepreneurship and Labor Skills in Indonesian Economic Development: A Symposium. Introduction by Benjamin H. Higgins. (Monograph Series No.1). New Haven, Yale University, 1961, *pp. 110.*

所謂新興国における経済発展の問題は，極めて多元的領域の問題である。それは，単に経済の問題ではなく，同時に，政治，社会や，文化の問題でもある。この書物は，特に，後者の観点より，インドネシアの経済発展を取扱った四つの論文を収めている。一つは，後進国経済発展の問題，特にインドネシアに関する問題に興味を持つ経済学者，Higgins による，インドネシア経済発展の巨視的な見通しを取扱った論文である。他の三つは，微視的な事例研究である。経済社会学者の Everett D. Hawkins は，batik 工業の経営者層を分析し，英国の人類学者 Leslie H. Palmier は，中国人共同体における batik 工業を取扱い，経済学者 Harold W. Guthrie は，労働力の問題を取り挙げている。いずれもインドネシアの現状を理解する上に，興味ある論文であるが，Higgins の論文は，単に経済発展の問題の所在の理解のみならず，全体社会の構造の理解にも役立つ。

彼は先ず，次のような仮説より出発する。即ち，後進国経済の発展に必要な社会的，文化的条件は，経済合理性を志向する企業経営者層の形成と，企業活動を促進援助する権力と希望の担い手である政治的エリート層である。後者の条件は，後進国経済では，発展の「速度」が特に問題となる為に，極めて重要である。この仮説に基づき，三つの問が設定される。(1)企業経営者層の社会的文化的特質はどのようなものか。(2)経営者層と政治的エリート層の関係は，どうであろうか。

Higgins は，C. Geertz のジャワとバリ島の研究資料，E. A. Pelzer のバタクの研究資料を用いて，この二つの問題に接近する。そして，いずれの場合においても，経営者層は，社会的に，政治のトップ・レベルへの昇進を閉された sub-dominant elite であり，文化的には，禁欲的経済倫理の担い手であることを指摘する。唯，バリ島の場合，それは，旧貴族であるた